

ヘビのいる風景

～アオダイショウとニホンマムシ～



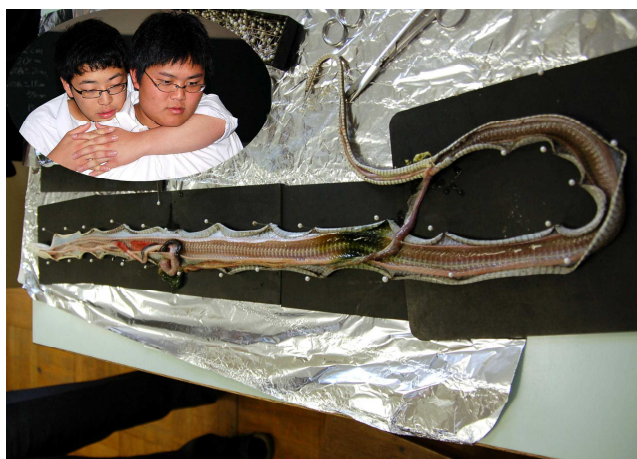
カメのワナに入ったアオダイショウ(6/8)



川で見つけたニホンマムシ(6/18)

「**ヘビは苦手である。**」と思っていた。今でも基本的には変わらない。しかし、今年になって、どういうわけかヘビが寄ってくるのだ。(といっても、すり寄ってくるわけではないが…) 公使さんが捕まえたヘビをくれたり、カメのワナにヘビがはいったり、学校の駐車場で出くわしたり、生徒が川や校庭で目撃したり、という事例が後を絶たない。数えてみると、3ヶ月足らずの間に、アオダイショウが6件、ニホンマムシが1件。決して少なくない数である。

アオダイショウは人家周辺で最もよくみられる種で、ネズミなどを食べるので有益な動物として、大切に扱われてきた。佐野高校の校庭での目撃例の多さは、エサとなる小動物が生息していることの証であろう。**ニホンマムシ**は、毒蛇として恐れられているが、実際にはおとなしいヘビで、マムシの方から向かってくることはないという。いずれも、生態系の上位に位置していることから、その地で生態系が機能していることを思うべきであろう。ヘビのいる風景こそ自然なのである。



解剖実習(5/28)

公使さんが捕まえたアオダイショウはすでに死んでいたもので、理系の生物選択クラスで解剖を行った。私自身もヘビの解剖は初めてであった。大学でヘビを解剖した先輩が「ヘビの解剖には感動したなあ。あの細長い体の中にびったり収まるように、対になっている臓器は上下にずれているんだ。」と語ってくれた言葉がずっと頭にこびりついていて、アオダイショウの解剖を思い立ったのは、その言葉を自分でも確認したかったのと、その興奮を佐高生にも伝えなかったからなのかもしれない。